The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	三浦梅園あての中井履軒書簡
Author(s)	岩見, 輝彦; 湯城, 吉信
Citation	懐徳堂センター報. 2009, 2009, p. 29-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24400
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懐徳堂センター報２００９　（大阪大学大学院文学研究科・文学部懐徳堂センター　二〇〇九年二月二八日発行）

三浦梅園あての中井履軒書簡

岩見輝彦　湯城吉信

はじめに

江戸時代の有名な天文学者・麻田剛立（一七三四～一七九九）は、安永元年（一七七二）、豊後の杵築藩を離れ大坂に移住し、中井竹山・履軒兄弟と交流しながら、正確な天文観測の観察や解剖を続けた。その剛立や兄、綾部妥胤を仲介とし、中井履軒（一七三二～一八一七）と三浦梅園（一七二三～一七八九）との間で書簡の交換が行われていた。三浦梅園（字は安貞）は、剛立の父、杵築藩儒の綾部絅斎を師とする、九州国東半島の思想家である。梅園は、天地万物は気・物、陰・陽のような「対」になっているとする「条理学」で有名な他、漢学者として『詩轍』という漢詩概説書もまとめている。この梅園の著書、蔵書、草稿、書簡などは、三浦家の子孫が襲蔵し、今は国東市三浦梅園資料館で保管されている。その中には、懐徳堂から送られた資料も存在する。(一)

本稿では、三浦梅園資料館に保管されている資料を中心に、中井履軒が三浦梅園にあてた書簡五通を紹介したい。これらの書簡を見ると履軒と梅園とが、いつ頃、どのような交流を行っていたのかを確認できる。中井履軒の書簡は、兄中井竹山の書簡に比べて伝存しているものが非常に少ないと言われるだけに、これらの書簡は非常に貴重な資料であると言える。(二) 本稿で紹介する書簡は五通であるが、管見の及ぶ限り、その中の二通はこれまで翻刻されたことがない。ただし、翻字には誤りも存在すると思われる。博雅の士のご批正を賜りたい。

三浦梅園あての五通の書簡

今回、確認できた三浦梅園あての中井履軒書簡は以下の五通である。すべて、梅園からの手紙に対する返書である。（逆に梅園が中井兄弟にあてた書簡については、転写や手控えを含め一通も見つけられなかった。）これらの履軒書簡の、現在の所有者、書簡の日付、推測した差出年次は、以下のようである。

【その１】三浦晋一氏所有「十二月十二日」付書簡：
安永三年（一七七四）か

【その２】　同前　「七月朔（一日）」付書簡：
安永五年（一七七六）

【その３】《現存未詳》　「八月十一日」　付書簡：

安永五、六年頃か

【その4】友弘征一郎氏蔵「十二月十二日」付書簡：

安永六、七年頃か

【その5】三浦晋一氏所有「三月二十五日」付書簡：

安永八年（一七七九）

この中、【その1】【その2】【その5】の三通は、梅園から七代を重ねた現当主・東京都在住の医師・三浦晋一氏の所有。現在、平成十二年の秋に三浦家の敷地に隣接し公設された三浦梅園資料館（現・国東市安岐町富清2507-1）の収蔵庫で保管されている（整理番号「エ28」「エ27」「エ26」）。いずれも美濃判の和紙、横44cm、縦33cmを横長になるように二つ折りして使用している。一枚の書簡用紙のように、端まで書き終わると裏側に墨をつづけ、字面高さは、すべて約14・5cmである。掲載写真は、いずれもそれを広げて撮影したため、紙の下半分は文字の天地が逆になっている。

【その3】は後述のように現存ならびに収蔵者も未詳であるが、昭和十八年刊『三浦梅園書簡集』の翻字によって紹介する。ただし日付や署名の書式および全文の長さが、梅園家にきちんと伝わった他の三通と同類の書簡かと思える。

【その4】だけは独特の形式であり、用紙も装飾性に富んだ薄紫・藍色の華箋紙であり、末尾も月日と同じ行に続けて「中井徳二」とあり、花押のような署名「積德」は見えない。現在、梅園など先賢揮毫の漢詩や南豊文人画の収集家である友弘征一郎氏により「三浦梅園遺墨館」（国東市安岐町富清447）で保管されている（土日と祭日に無料公開）。

なおその他、三浦梅園資料館には、剛立の兄、綾部妥胤（通称：文左衛門）に託しての「十月十七日」の外包みも、いっしょに保管されていた（図1）。こちらは美濃判半裁で、三通の書簡のちょうど半分の大きさ

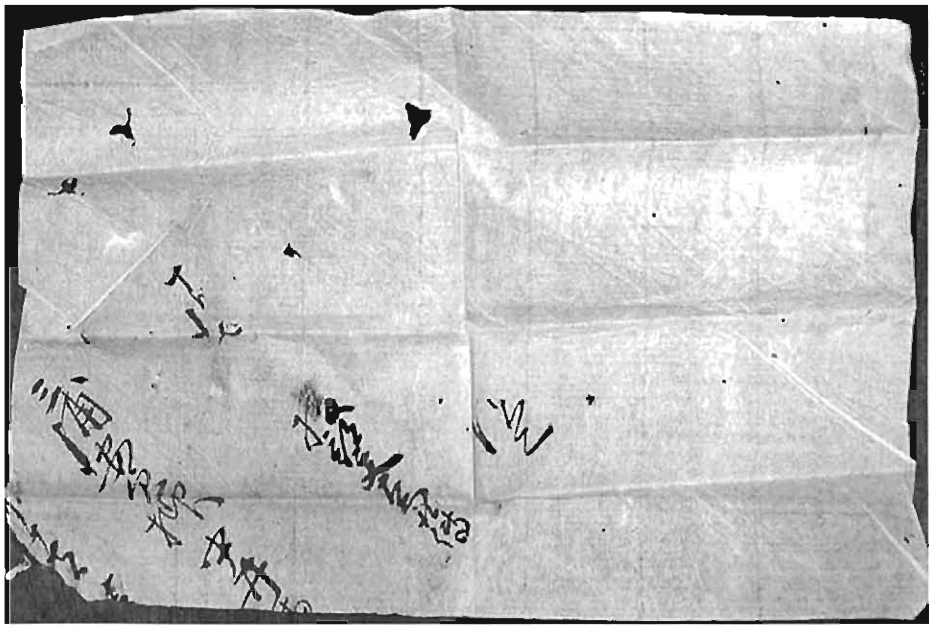


図1　履軒書簡「十月十七日」付け外包み

である。一連の整理番号は付されず、この紙に包まれていただろう「十月十某日」付の書簡も現存しない。ただし、履軒から梅園の書簡がどのように渡されていたかを知る貴重な資料だと考えるので紹介しておく。

なお、【その1】【その2】は、大分県立先哲史料館編『麻田剛立資料集』（大分県先哲叢書、一九九九年【以下「先哲」と略称】）に翻字されているが、誤読だと思える個所を訂正した。

【その1】三浦晋一氏所有「十二月十二日書簡」〔先哲六〇頁〕：安永三年（一七七四）か。

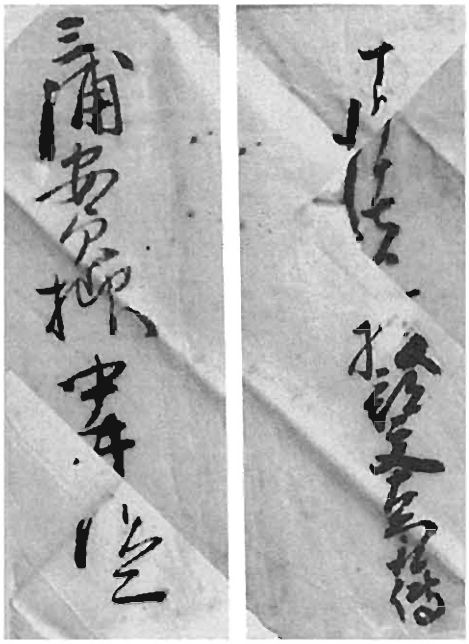
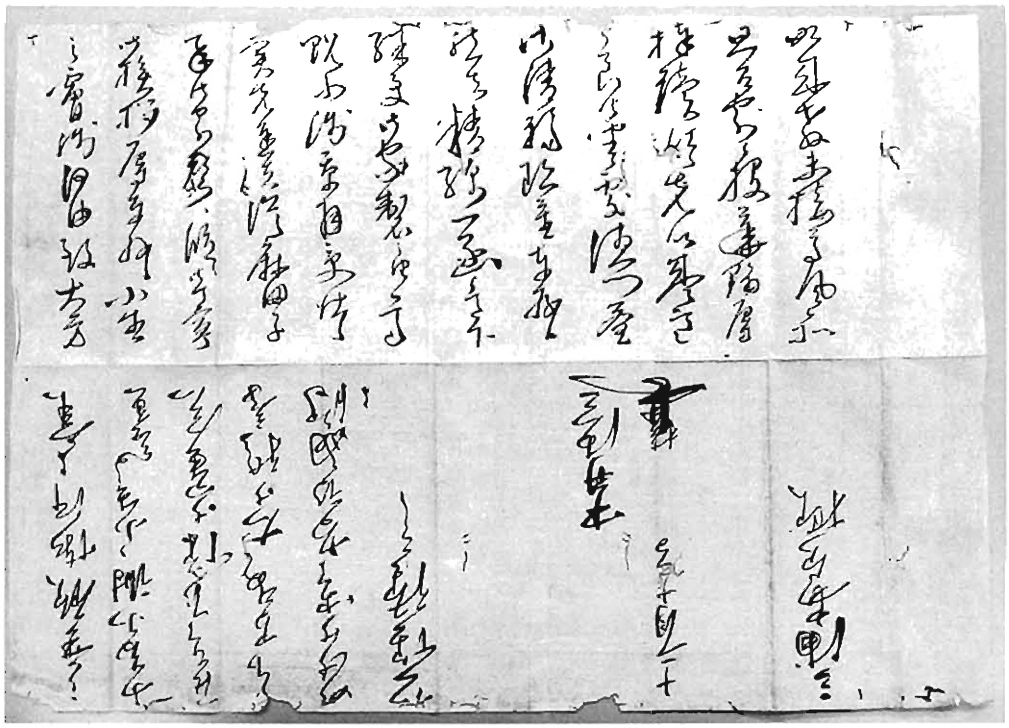


図２　外包みを包んだ場合（＊画像加工による再現）
（表）三浦安貞様　中井徳二
（裏）十月十七日　綾部文左ヱ門殿傳



【その１】三浦晋一氏所有「十二月十二日書簡」〔先哲六〇頁〕：安永三年（一七七四）か

如來教、未接高風候所、
思召寄被投華翰、辱
捧讀仕候。先以盛寒
之節御坐候處、德門益
御清福、珍重奉存候。
然者、精綿一函被送下、
殊更御家製之由、高
忱不淺、忝拜受仕候。
実先達者、從麻田子
承御家聲候。段々御丁寧
御挨拶辱奉存候。小生
之膚淺、何由致大方

【下半部へ】

之垂顧、慚汗之実
不知所謝候。小生事 無恙
罷在候。乍憚御懸念
被下間敷候。右御禮旁、
如此御坐候。尚期嗣鴻。
恐惶謹言

中井德二

十二月十二日　　積德

三浦安貞様

《大意》

仰せのように、いまだお目にかかっておりませんが、いただきました
お手紙を、かたじけなく拝読いたしました。盛寒のみぎり、ご一門ます
ますご清祥のよし、お慶び申し上げます。

さて、精綿を一函、お送りくださり、ことさら御家製のよし、ありが
たきお心遣い、かたじけなく拝受いたしました。かねて、麻田先生より
ご一門のお噂は承っております。ずいぶんとご丁寧なご挨拶、かたじけ
なく存じたてまつります。不学な小生が、何によって先生のお目に叶っ
たのか、冷や汗もので、どのように感謝申し上げてよいのかわかりませ
ん。

小生こと、恙なく過ごしております。他事ながらご懸念くださりませ
んように。

右、御礼かたがた申し上げます。なお次の手紙を心待ちにしておりま
す。　恐惶謹言

中井德二

十二月十二日　　積德

三浦安貞様

《差出年次の推測》　安永三年(一七七四)十二月十二日か（最も早くて
安永元年)。

「かねて麻田先生よりお噂を伺っております」という内容からして、
履軒から梅園への初めての返書である可能性が高い。麻田剛立は、豊後
杵築で郡奉行も勤めた儒者の綾部絅斎（梅園の師）の第四子で綾部妥彰
と言ったが、大坂に出てから名を改めた。

麻田剛立が大坂に来たのは、安永元年（一七七二）二月六日である（剛立への改名や大坂着を報じる中津藩の賀来子登あて書簡（大分県立先哲史料館購入、【先哲五八頁】）による）。そこで、この書簡は最も早くて安永元年末のものだということになる。ただ、剛立を通じて、履軒と梅園が文通を開始するのは安永三年になってからのようだ。安永四年（一七七五）[三]の麻田剛立あて三浦梅園四月十八日付け書簡（【先哲三九頁】）には、梅園が剛立を通じて中井先生と文通できたことを謝する下りがある（原文「先達而者、以御紹介中井先生遂文通忝奉存候」）。この安永四年四月以前に文通が始まっていたはずなので、この十二月十二日書簡は安永三年のものだと考えるのが妥当であろう。

なお、上記三浦梅園四月十八日付け書簡には、「中井氏初女孝状」とは、安永三年十二月に完成した履軒著「錫類記」を指すと思われる。「錫類記」は豊後国杵築において老母に献身的な孝養を尽した孝女初のことを漢文で記したものであり、[四]両者の文通は孝子貞婦顕彰運動を媒介に始まったと考えられる。[五]

なお、梅園が履軒に贈った「精綿」については未詳である。木綿ないし綿花の栽培が、江戸時代に国東半島で行われていたとの記載は大分県史・地方誌の類に見出せず、また三浦梅園が試みたとの記録や伝承もない。履軒へと一箱分届けられた梅園家自家製の「精綿」とは、カイコの繭からほぐした真綿だったのかもしれない。麻田剛立から梅園への別の書簡では、カイコの養育方法や桑の葉の与え方についての報告も見えるからである（【先哲七頁、十一頁】）。

因みに、初の孝状を記した梅園作『愉婉録』巻下「紺屋町はつ」の章には、安永五年（一七七六）冬、上坂した綾部妥胤（やすたね）（剛立の兄）に託して、中井竹山から初に贈り物が贈られ、その返礼に、初が手製の手拭いを送ったとある。[六]竹山は大いに喜び、翌安永六年（一七七六）正月の宴会の際、妥胤を来賓として招き、「豊後杵築孝女初手製」と書いた初の手拭いを掛けたという。上記書簡の手製の精綿はあるいはこの手製の手拭いと関係するのかもしれない。

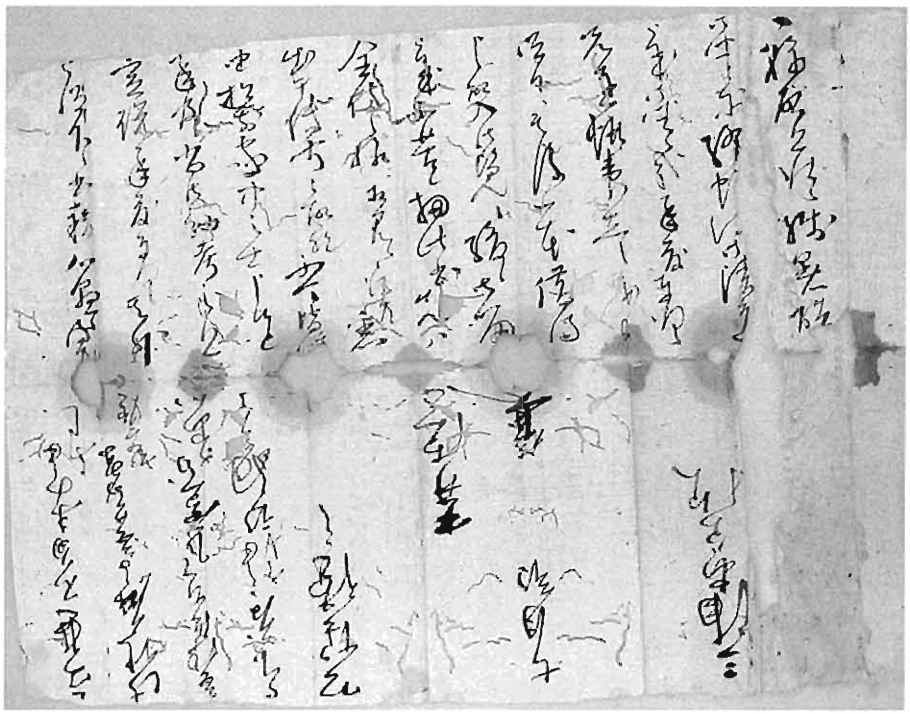
また、上記三浦梅園四月十八日付け書簡には、中井竹山・履軒が漢詩の応酬を好むか否かを質問している他、以下のような記事も見える。

一、乍延引、中井君へ書状又々指上候。御序御届可被下候。

梅園は麻田剛立あての手紙に中井兄弟への書簡も同封し、ついでに届けてくれと頼んでいたことがわかる。先に外包み（図1）の紹介でも述べたように、梅園と履軒の書簡の往復は、知人を通じてのものであった。

【その2】三浦晋一氏所有「七月一日書簡」〔先哲五九頁〕：安永五年（一七七六）

一翰啓上仕候。殘暑烈強
御坐候所、彌帆門（？）御清◆　　【◆破損につき推読不能】
被成御坐候哉、承度奉存候。
先達、蝦夷志之義 被
仰下候。其後一本借得
申候故、入御覧候。緩々御留



【その２】三浦晋一氏所有「七月一日書簡」〔先哲五九頁〕：安永五年（一七七六）

被成不苦候。扨此書、先ハ
全備之様ニ相見へ候得共、悉
出千傳寫之故歟、不可皆信
由、松前家中之士申候と
承及候。尚御勘考之上、
宜説承度奉存候。其外
被仰下候書籍 心懸候得共、

【下半部へ】

交遊不多、未入手不申候。
此地麻子無御別條、弊庵
無他罷在候。乍慮外、御安心
被下度候。餘期嗣音候。
恐惶謹言

中井徳二
七月朔　　積徳

三浦安貞様

《大意》

お手紙啓上申し上げます。残暑厳しき折、いよいよ帆門（徳門？）ご清祥にあそばされているよし、承りたく存じます。

先に、『蝦夷志』について、仰せ下されました。その後、一冊を借用できましたので、ご覧に入れます。ゆっくりとお留め置きくださって結構

です。

さてこの書、一見十分なもののように見えますが、ことごとく伝写に出るためか、すべては信じることができないよし、松前藩の家中の士が話していたと聞き及びました。なおご勘案の上、ご高説を承りたく存じます。

そのほか仰せ下されました書籍、心がけておりますが、交遊も狭く、まだ入手できておりません。

こちらにて麻田先生は別条なく、我が家も変わりなく過ごしております。他事ながらご安心ください。その他のことは次の手紙を期すことにします。　恐惶謹言

中井徳二

七月一日　　積徳

三浦安貞様

《差出年次の推測》　安永五年（一七七六）七月一日

この書簡は、履軒が新井白石の『蝦夷志』をすでに梅園に貸与していることから、年次を推測できる。梅園は年間、一～数冊の読書ノートを残している（重要文化財指定）。その中に、抄録した書物の題名を「丙申目次」（＊安永五年）と書き連ねる冊子のなかばに、わずか四行だけながら、

○蝦夷志　白石先生

蝦夷之産　春菊有花白者　百合有葉黒者

東北諸夷　茅高丈餘　蓬高二丈許

虎杖如竹　樹皆数十囲

烏鳶鴟狐皆大

と書き抜いた部分がある（明治三十九年刊『新井白石全集』第三の頁で六八五・六八八のそれぞれ下段に該当）。これを、履軒に依頼して借りた『蝦夷志』とみなすと、上記履軒書簡の年次は安永五年丙申と推測できる。

ちなみに、梅園が白石の『蝦夷志』の入手に手を尽くしていた様子は以下のような事実から窺える。

まず、中津藩の友人・賀来子登にあてた安永元年（一七七二）四月十八日付書簡に、

一、蝦夷志ハ何分御うつし取可被成候。

とある（剛立の大坂着を報じた書簡と同じ【先哲五七頁】）。これは「中津で『蝦夷志』を見かけたなら、写し取ってくれ」という依頼であり、この書簡以前、すでに梅園の『蝦夷志』探しは始まっていたのであろう。

また、梅園は、中井履軒に頼むと同時に、京都の儒者、高伯起（一七二四～一七七六）にも『蝦夷志』を求めている。高伯起とは、梅園塾の門下生を通じての交流である。梅園の「復高葛陂書」（三浦家伝蔵の漢詩文集『孤筇』巻下所収、天保二年版行『贅語（天人帙）』巻下の冊末にも「附刻」あり）。その終わり近くに、

且聞源君美氏、著蝦夷志、渇望久矣。豈無有帳中蔵之乎。有則許一

涉獵。

と、『蝦夷志』の所有の有無を尋ねている（日付は「安永丙申（＊五年）夏四月朏」（＊朏は三日月）。ただし次に梅園の元に届いたのは、高葛陂がこの安永五年八月八日に没したとの訃報であった（『梅園詩集』巻下所収の七言律詩「哭高葛陂先生」小序参照）。

このように知友に広く尋ねていた『蝦夷志』が、大坂の履軒から送られて、梅園はさぞかし喜んだことであろう。

【その3】小野精一編『三浦梅園書簡集』（一九四三年）所収「八月十一日付書簡」〔翻刻あり、現物は未確認〕：安永五年（一七七六）から安永六年（一七七七）頃か。

＊同書翻刻の句読箇所を改めた所がある。

綾宰上都し度々接清晤（日名子太郎氏蔵）

四月十九日の高教、辱く拝讀仕候。
先以 絳帷益御清勝 珍重奉存候。
客年 菲薄の品差上候處、
御丁寧御謝辭 不堪慚懼候。
先頃、綾宰君御上都
度々得接清晤、
毎度 御噂承申候。
無程、歌驪駒可申候。
此地の事、お序御聞可被下候。
暑中 諸事懶癈、
尊答甚及延引候。
此段被敎海容候。
於當地御用之義御座候節者、
無御隔意 可被仰下候。
随身相應の義ニ御座候はば、
斡旋可仕候。
秋暑尚烈、萬自重。
恐惶謹言
八月十一日　中井德二（花押）
三浦安貞様

（注）『三浦梅園書簡集』によれば、綾宰は麻田剛立の長兄の綾部妥胤（やすたね）。「歌驪駒」には「驪歌といひ驪駒といふ送別の歌なり、白馬驪駒の語あり」との割り注あり。

《大意》

四月十九日づけのお便り、拝読いたしました。まずもって絳帷（赤く帳をさげた家塾）、ますますご清勝とのこと、お慶び申し上げます。昨年、下らぬ物を差し上げましたところ、ご丁寧なご謝辞をいただき、恐縮しております。

先頃、綾部様（麻田剛立の兄、綾部妥胤（やすたね））がご上都なされ、たびたびお目にかかることができ、いつも、お噂を伺っております。ほどなく

〔帰郷される綾部氏と〕送別の宴を催すことになります。〔綾部氏から〕この地の事を、ついでにお聞き下さることでしょう。

暑中、すべてものうく、ご返答がはなはだ遅れましたこと、ご容赦下さい。当地において御用のことがございますれば、ご遠慮なくおっしゃってください。お役に立てるようでしたら、ぜひとも尽力させていただきます。

秋暑なおはげしき折、よろずご自愛ください。　恐惶謹言

八月十一日　　中井徳二（花押）

三浦安貞様

《差出年次の推測》　安永五年（一七七六）から安永六年（一七七七）頃か。

年次を確定させるためには、剛立の実兄・綾部妥胤（やすたね）（字は伊承、号は富阪、通称は文左衛門）がいつ大坂に滞在したかを調べなければならない。

中尾弥三郎著『三浦梅園外伝』（一九八九年自刊）の項目「綾部伊承・麻田剛立とその一統」によれば、綾部妥胤（やすたね）は大坂で何度も中井竹山に会っている（没年月日は、天明二年（一七八二）九月五日、享年六十四歳）。この書簡に見える夏頃の大坂滞在は、【その4】の「綾部様からこちらのお話をお聞きになったようですね。綾部様によろしくお伝え下さい」と対応していると考えれば、安永六年（一七七七）あたりであろうか。【その4】の書簡を見れば、その前に梅園が履軒に複数の依頼をしていたことがわかるが、それもこの書簡にある「ご用があれば遠慮なく申しつけ下さい」とあることと対応する。

また、竹山『奠陰集（詩集）』には、竹山から妥胤（やすたね）への贈答詩が数首見える。巻五には、安永四年（一七七五）あるいは安永五年（一七七七）七月の作と思われる「七夕与豊後綾部伊承及府下諸友泛二舟浪華橋西」（五律）、「其二贈伊承」（五律）、「走筆和伊承韻」（五絶）、「次韻和豊後綾部伊承枉駕見贈之作…」（七律）、および、安永六年（一七七七）五月の作と思われる「仲夏綾部伊承嘉招、与羽倉子晟、大城文師、葛子琴、及家弟、江上泛舟、兼送文師帰肥」（七古）、「伊承時命漁舟以随、黄昏予揖子晟登之、和其即事韻」（七絶）が見える。なお、年代は不明ながら、『懐徳堂先賢墨迹』（隆文館、一九一二年）に「七夕陪竹山先生与履軒君及諸賢泛舟」と題する綾部妥胤（やすたね）の五言絶句二首（自筆）が見える。

なお書簡の所蔵者として名が挙がる日名子太郎（一八六五～一九二六）は、明治末年の別府町長であり、町長在職時の明治三十九年、大阪朝日新聞の記者だった西村天囚を招いて別府・大分・国東を案内している。『三浦梅園書簡集』刊行時はすでに故人である。

その旧蔵書だった三浦梅園自筆の『敢語』初稿や、古文書の一部は別府市立図書館に現存する。ただし、この履軒の梅園あて書簡についての問い合わせたところ、「別府市立図書館に所蔵している「日名子文書目録」と実物の確認をしたところ、該当の文書は見つかりませんでした」との返答しか得られなかった。

なお、西村天囚は、大阪朝日新聞に「豊後路」という連載を発表し、明治三十九年（一九〇六）十一月二十八日付け「豊後路」別府の記（十二）で日名子文書を紹介している。また、明治四十四年の日名子太郎刊『大化帖』に跋を書いている（『碩園先生文集』巻一（懐徳堂記念会、一

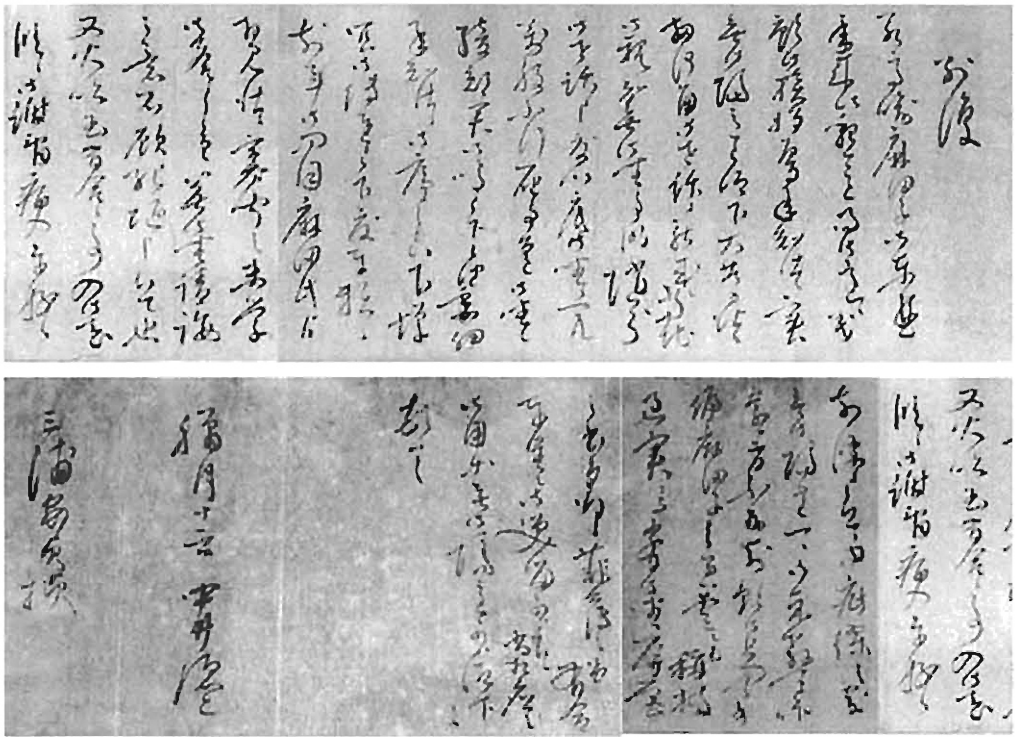
九三六年）「大化帖跋」庚戌（明治四十三年）。その中で、「予嘗游別府、與柚軒相識（予嘗て別府に游び、柚軒と相い識れり）」と豊後路の旅の際、日名子太郎に知り合ったことが述べられている。

また、『三浦梅園書簡集』の編者・小野精一（一八七七～一九五〇）は、宇佐で活躍した郷土史家で、梅園だけではなく広瀬淡窓旭窓、帆足万里の書簡集も編纂刊行している。

【その４】友弘征一郎氏所蔵「十二月十二日付書簡」〔従来、翻刻なし〕：安永六年（一七七七）から安永七年（一七七八）頃か。

拝復

若高喩、麻田子御東遊
爾來御懇意、得御意候義、
預御挨拶、辱承知仕候。実
無御隔意被仰下、大慶仕候。
扨何角御世話に罷成候。當地
御親知無御坐事故、随分
御世話申度心底御坐候へ共、
萬般不行届事而已御坐候。
綾部君御噂被下候由、委細
承知仕候。御序之節、乍憚
宜御傳達被下度奉頼候。
前年御問目　麻田氏より



【その４】（三浦梅園遺墨館友弘征一郎様提供）

拝見仕候。寡聞之末學
御答申ニ而ハ無御坐候。請誨
之意、不顧赧愧 申上候也。
又火吹玉有合候事、入御意、
段々御謝辭、痛入奉存候。

【貼り継いだ用紙の色変わる】

前條被仰下内、疵謬之處、
無御隔意 一々御示教可被下候。
遠方不存知、預御足下◇事、
偏麻田子之惠愛ニ而、稱揚
過実ニ而 不有御◇（坐？）候。屏扁
之書 奉存候。菲薄之品、有合
奉呈候。御笑留可被下候。
尚相應之
御用等、無御隔意 可被仰下候。

頓首

臘月十二日

中井德二

三浦安貞様

《大意》

拝復　仰せのように、麻田様のご東遊からこのかたのご懇意、ご意向にかないました義、ご挨拶に預かり、かたじけなく承知いたしました。実に隔てなく仰せ下さり、ありがたき幸せに存じます。

さて何かとお世話になりました。当地にご親族お知り合いがおいでになりませんので、随分お世話申し上げたい気持ちはございますが、何かと不都合ばかりでございます。

綾部様（＊剛立の兄の綾部妥胤（やすたね））が噂をお伝え下さったよし、委細承知いたしました。ついでの節、よろしくご伝えくださいますよう、お願い申し上げます。

前年のご質問項目、麻田氏より伺いました。無学な私にはお答え申し上げるどころではありません。[逆に]教えを請いたいと思い、恥もかえりみずに申しあげたまでです。

また火吹玉をあり合わせで送りましたところ、お気に召したようで、ご丁寧にお礼をいただき、恐縮しております。

前条仰せ下さったうち、誤謬の箇所は、遠慮なく一々ご教示いただければ幸いです。

遠方にて存じあげぬまま、ご交流に預かっていることは、ひとえに麻田様のお陰です。[麻田氏の]評価は身に余るもので、おっしゃるほどのことはございません。

屏扁（横額）の書の件、了解いたしました。つまらぬものを、有り合わせで進呈いたします。ご笑納下さい。

なおこちらでできる御用など、ご遠慮なくお申し付け下さい。頓首

十二月十二日

中井德二

三浦安貞様

《差出年次の推測》　安永六年（一七七七）から安永七年（一七七八）頃か。

年次を確定させる事項は見当たらないが、前後関係を窺うことのできる内容がいくつか見える。

まず、梅園から履軒への質問項目とは、新井白石『蝦夷志』を読んだ梅園が蝦夷について尋ねたものだと思われる。三浦梅園『帰山録』下に以下のように言う（大正元年刊『梅園全集』上巻一〇八八頁～）。

…浪華の中井履軒に白石の蝦夷志かりて不審なる事共問て遣はしける頃、かなたより蝦夷の辯を書て贈られたり。甚痛快を覺ゆ。

『蝦夷志』を読んだ梅園が、不審な点を履軒に尋ね、それに対して履軒は漢文の「蝦夷辨」を書いて送ったのである（つまり【その4】は【その2】からしばらく後）。なお、この「蝦夷辨」は上記『帰山録』の引用の後に全文が引かれるが、懐徳堂文庫では新田文庫『履軒先生遺稿雑集』に見せ消ち入りの履軒草稿が見える。内容は、古代、蝦夷とは日本の域外の粛慎国を指すとするもので、懐徳堂学派に共通する考えである。[七]

綾部妥胤（やすたね）に関する内容は、【その3】の《差出年次の推測》で述べたように【その3】の上坂と対応しているものと推測できる（つまり【その4】は【その3】の後）。

屏扁（横額）の書については、この書簡から、梅園が履軒に依頼していたことがわかる。【その5】に「鄙墨が着いたようですが、お褒めに預かり冷や汗をかいております」とあるのはこれに対応したものであろう（つまり【その4】は【その5】の前）。

なお、履軒が梅園に贈っている「火吹玉」について述べておきたい。「火吹玉」は「火吹達磨[八]」のことを指すと思われる。三浦家に伝わった資料により、その所蔵と紛失とを確認できる。

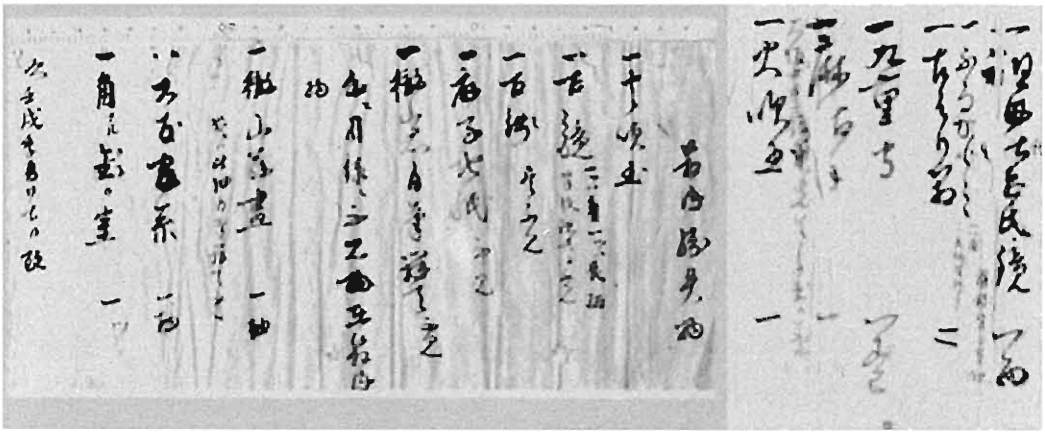
まず、三浦家に伝わった梅園自筆資料の中に、「覚」と題され、書幅および什宝類の品目を列記した文書がある（紙片の高さ約16・5㎝）。その最後に、

大坂中井履軒先生より送り來ル
一　火吹玉　　一

とある。ただ、「箱内紛失物」と題した文書（紙片の高さ13㎝・抄者不明）の筆頭に「火吹玉」が挙がっている。同文書の末尾には、「右　壬戌季夏廿七日改」とある。梅園没年（寛政元年）以後の「壬戌」は、享和二年（一八〇二）か、文久二年（一八六二）であり、すでに江戸時代にこの「火吹玉」が紛失していたことがわかる（以上、両文書は、ともに国東市刊『史跡 三浦梅園旧宅保存修理工事報告書　資料編』（二〇〇七年）一五頁、一七頁に写真および翻字が見える）。

【その5】三浦晋一氏所有「三月二十五日付書簡」〔従来未翻刻〕：安永八年（一七七九）

尚々 説詩晬語之義、被仰
下候。交游中并書肆相尋
候得共、未見影迹候。追而



左：壬戌季夏二十七日改「箱内紛失物」覚　　右：三浦梅園自筆「覚」（所蔵品目録）
（国東市刊『史跡　三浦梅園旧宅保存修理工事報告書　資料編』（二〇〇七年）一五頁、一七頁）
＊「壬戌」は享和二年(1802)か文久二年(1862)。

見當候ハバ、可入御覧候。　已上

歳首并去仲冬之
華翰　同時相達、忝
捧讀仕候。先以新祉
萬福　益御康寧
被成御坐目出度　奉存候。
去秋　長崎御遊歴　被成候由、
健羨之至　奉存候。寶
石頒帋　御恵投、忝
窓下可玩撫、如接
清兄、不可(得?)不淺奉存候。

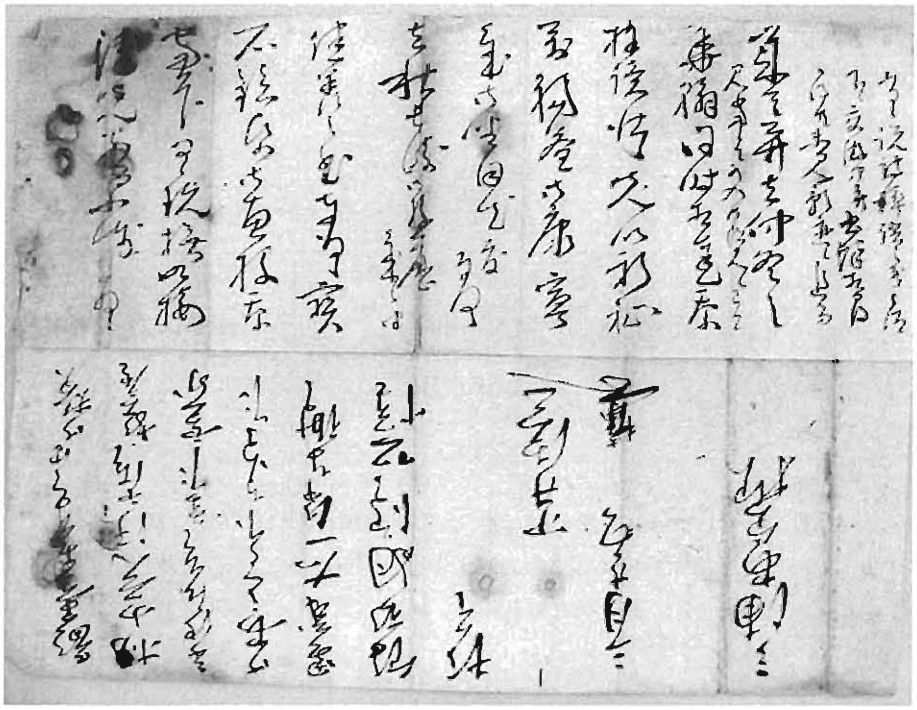
【下半部〈】

鄙墨相至候由、御贄
揚　不覺汗霑候。弊庵
無他罷在候條、乍慮外
御安意被下奉存候。乍
畧義、右一帋奉謝候。
餘期嗣鴻候。恐惶
頓首

中井德二

三月廿五日　　積德

三浦安貞様



【その５】三浦晋一氏所有「三月二十五日付書簡」〔従来未翻刻〕：安永八年（一七七九）

《大意》

年初ならびに昨年十一月のお手紙、同時に着き、かたじけなく拝読いたしました。

まずは謹賀新年、ますますご清祥のよし、お慶び申し上げます。

昨秋、長崎にご遊歴のよし、羨ましい限りです。宝石文鎮ご恵投いただき、かたじけなく文机にて使わせていただくことができ、まるで清兄と接するようで、ありがたきことと存じたてまつります。

私の書がそちらに届きましたよし、お褒めに預かり覚えず冷や汗を流しました。我が家は変わりありませんので、他事ながらご安心ください。

簡単ではありますが、右一紙、お礼を申し上げました。その他のことは、次の手紙を期すことにします。　恐惶頓首

中井徳二

三月二十五日　　積徳

三浦安貞様

追伸　仰せになっていた『説詩啐語』の義、知り合いや本屋に当たってみましたが、まだ見つかりません。見当たりましたら、追ってご覧に入れたく存じます。以上

（注）『説詩啐語』…清・沈徳潜撰の詩論。以下の《差出年次の推測》参照。梅園家蔵の漢籍には見えない（昭和五三年刊『三浦梅園自筆稿本並旧蔵書解題』に見えず）。

《参考》心斎橋の本屋

心斎橋通には、当時、書肆が軒を連ねていた。その様子を『摂津名所図会大成』では、「古写本さがす好事客あれば、滑稽本を買ふ粋客あり、経史を見る儒者、仏書ねぎる出家、其餘、神書、歌書、俳書、詩文、随筆、物語、医書、軍談、…和様の手本物まで需に応じて鬻ぐが故に終日店の間暇なく…」と表現する。履軒が本を探したのもこのような本屋であったのであろう。同書には、以下のような詩も附されている。

書林櫛比心斎橋　書林 櫛比す 心斎橋
二酉五車巻帙饒　二酉 五車 巻帙 饒し
可知海外同文運　知るべし 海外 文運を同じくし
四庫珍編波及遥　四庫珍編 波及 遥かなるを
荒井鳴門

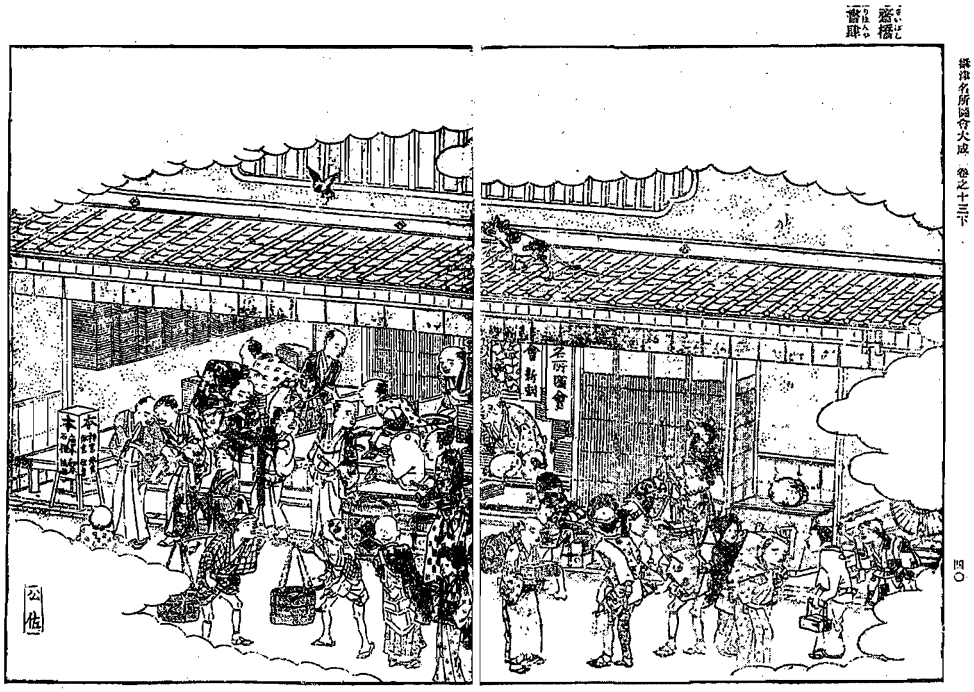
＊二酉、五車は共に書籍の多いこと。中国の故事に基づく。

《差出年次の推測》　安永八年（一七七九）

この書簡は、その前年（安永七年）秋に梅園が長崎に旅行したことに触れており、年次が確定する。梅園からのみやげの「鎮紙」は、長崎で求めた文鎮であろう。ただ宝石と文鎮を贈ったのか、宝石でできた文鎮だったのかは未詳である。残念ながら、『懐徳堂水哉館遺書遺物目録』には、それらしきものは発見できない。

また、履軒が贈った書とは、書簡【その4】で送りますと言っていたものであろう。

長崎旅行の前後、梅園はその見聞録『帰山録』と、『養生訓』という和



心斎橋通書肆（『摂津名所図会大成』巻十三下）

文の著作を書いているが、『帰山録』巻下には履軒の漢文「蝦夷辨」を、『養生訓』には同じく「祭食河豚死者文」を、そっくり引用している。「祭食河豚死者文」は、履軒の文集『弊帚』に見えるが、三浦家の伝存資料には『弊帚』写本も見える(E 209)。

以下、追伸にあたる「尚々書き」で触れる、清・沈徳潜撰の詩論『説詩晬語』について述べておきたい。梅園の抄録帳でも、安永八年(一七七九)の「己亥抄 己」の冊末近く、『魏書』志類からの大量の書き抜きの前に、

○ 説詩晬語　長州沈徳潜碻士　(＊「碻」は「確」の異体字)

と書名・撰者名を記して、帳面の見開きに五条の書き抜きをした箇所がある。その「鼓吹横吹」との見出しで書き抜いた部分は、梅園が和文で綴って刊行した漢詩概説書『詩轍』巻六に引用されている。梅園自身は、入手先は記録していないが、履軒から送ってもらったものかもしれない。

おわりに

本稿では、中井履軒が豊後の三浦梅園にあてた書簡五通を紹介した。これらの書簡から以下のようなことが確認できる。

まず、履軒と梅園とは、麻田剛立とその兄の綾部妥胤を仲介として書簡を往復させており、五通の書簡はすべて履軒から梅園への返書である。時期は麻田剛立が大坂に来てからの安永三年(一七七四)から安永八年(一七七九)の頃である。箇条書きにすれば以下のようである。

〔書簡前〕梅園、精綿を贈る。

【その1】「十二月十二日付書簡」(安永三年(一七七四)か、最も早くて安永元年):精綿の御礼。文通を得たことに感謝(→文通開始時の手紙)。

〔書簡前〕梅園、『蝦夷志』等の書籍を所望する。

【その2】「七月一日付書簡」(安永五年(一七七六)):『蝦夷志』発送通知(その他は未入手だと言う)。

〔書簡前〕梅園、四月十九日に書簡。贈り物に御礼。

【その3】「八月十一日付書簡」(安永五、六年頃か):綾部妥胤と大坂で会っていること。御用申しつけくださいと言う。

〔書簡前〕梅園、世話を頼む。履軒作「蝦夷辨」に対する御礼。綾部氏から噂を聞いたことを伝える。火吹玉に対する御礼。書幅を所望。

【その4】「十二月十二日付書簡」(安永六、七年頃か):世話できないことを断る。綾部妥胤への挨拶を依頼。「蝦夷辨」についての謙遜、ご教示依頼。火吹玉に対する御礼に恐縮。書幅を所望されたことを承知。

〔書簡前〕梅園、前年十一月、及び年初に書簡。履軒の書を誉め、『説詩晬語』を求める。

【その5】「三月二十五日付書簡」(安永八年(一七七九)):長崎土産の御礼。書を誉められたことに恐縮。(『説詩晬語』の未入手通知。)

以上の書簡の内容から、梅園は履軒に熱心に情報を求めていたことがわかる。『説詩晬語』や新井白石『蝦夷志』やその他の書籍を求めたり、書簡には直接見えないが、蝦夷について質問していたことも確認できるからである。そして、その礼として、精綿、宝石、文鎮などの物品を贈っていた。一方、履軒も自筆の書や火吹玉（火吹達磨）を贈っている。ちなみに、麻田剛立も梅園に天文観測器具を調達したりしている（【先哲】所収の書簡参照）。

ただ、本稿で紹介した書簡には、履軒と梅園とが深い学問的議論をしていた形跡は見あたらない。梅園の著作には履軒の著作の引用があるが、その逆はない。履軒の「蝦夷辨」は梅園の要望に応えて履軒がまとめたもので、履軒は梅園に意見を求めていたようだが、梅園がそれに応えた形跡は確認できない。この二人の交流は、梅園にとってより重要だったと言えるであろう。履軒は著作をめったに人に見せなかったと言われているが、完成後それほど経っていない時期に文集『弊帚』を贈ったりしているのも興味深い。

【謝辞】本稿で紹介した書簡【その4】については、三浦梅園遺墨館の友弘征一郎様から全面的な協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。

また、書簡の解読については、多治比郁夫先生のご教示をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

注

（一）一方、大阪大学懐徳堂文庫には、中井竹山らへの書簡を集めた『先哲手簡』（『懐徳堂文庫の研究』四〇頁に解題あり）と並河寒泉が筆写した『先哲書翰集』（『懐徳堂文庫の研究』七八頁に解題あり）とがあるが、その中に、梅園からの書簡は見あたらない。

なお、梅園の麻田剛立あての手紙は、大分県立先哲史料館編『麻田剛立資料集』（大分県先哲叢書、一九九九年）に三通見える。その中、三浦家当主の個人蔵の書簡と提示された二通「與綾正庵菴」と「與麻田剛立書」は、大正元年『梅園全集』下巻にも漢文のものが見える。

一方、順天堂大学に寄託されている「四月十八日」付の三浦梅園書簡（注三でも言及）は、剛立に届いた手紙の現物であり非常に貴重である。この書簡の縮小写真および購入の経緯は、酒井シヅ「三浦梅園の手紙―麻田剛立宛―」上・下（『日本医史学雑誌』三一―一・四、一九八五年一月・十月）に見える。

（二）『懐徳堂―近世大阪の学校』（大阪市立博物館（第103回特別展）、一九八六年）五二頁による。本稿で紹介するもの以外に筆者が存在を確認している履軒の書簡は以下のようである。

1，中之島図書館蔵「中井履軒書翰」（甲和925）

＊平野翠、多治比郁夫「若干の懐徳堂関係資料」（『大阪府立図書館紀要』二七号、一九九一年）に翻刻あり。

2，大阪歴史博物館蔵「中井履軒書状（荒木商山宛、九月尽日

付)」(歴7318)

＊『懐徳堂―近世大阪の学校』(大阪市立博物館、一九八六年)五二頁に影印、翻刻あり。明和二年(一七六五)以前のもの。

3，大阪大学懐徳堂文庫蔵「奉公人まつ請状」

＊『懐徳堂―近世大阪の学校』(大阪市立博物館、一九八六年)五二頁に影印、翻刻あり。天明八年(一七八八)の自分宛の請状(保証書)を自らが代筆して書いたもの。

4，大阪歴史博物館蔵「中井履軒書状(西村庄兵衛宛、正月二十四日付)」(歴6342)

＊『懐徳堂』(大阪市立博物館〈館蔵資料集21〉、一九九四年)に影印、翻刻あり。

(三) 同書簡に、三月十五日に日出藩主から「麻地酒」を頂戴したという記事があり、『梅園詩集』巻下の漢詩「日出侯賜酒」により年次が確認できる。安永年間の漢詩を作成順に整理してある写本『又乙二』(一部自筆)には、この七言律詩の題が以下のようになっている。

安永乙未三月十五日、奉拜日出侯辱麻池酒

なお、「麻地酒(あさぢざけ)」(または「麻池酒」)は、別府の北に位置する小藩・日出(ひじ)の特産品。その伝統は、日本画専門の美術館を有する二階堂酒造(本社は大分県日出町)に受け継がれているとのこと。

(四) 「錫類記」は、佐野大介「中井履軒「錫類記」及び孝女はつ関連文献について」(『懐徳堂センター報』二〇〇六)に翻刻がある。

(五) 以上、梅園と履軒の文通の始まりについては、『懐徳堂―近世大阪の学校』(大阪市立博物館、一九八六年)二四頁を参照した。

(六) 『梅園全集』下巻(梅園会編、一九一二年)所収の『愉婉録』二二七頁には、贈り物のことだけ述べるが、三浦梅園自筆・初稿本『愉婉録』には、以下のように、履軒が「錫類記」を著したことも見える。

郡監綾部妥胤(華名文左ヱ門)ハ初か久しくつかへし主人なり。妥胤安永丙申の冬、國の事有て大坂にゆかれしに、大坂学校懐徳堂の教授中井竹山先生はかねてしれる人にて彼にても先たつて初か孝状もきかれ、其弟履軒錫類記とて其事をしるされ、竹山先生よりかの初に贈り物有て其事を嘉しられたり。

(七) 懐徳堂学派の蝦夷に対する考えは、有働賢造「中井履軒と北辺問題」(『江戸時代と大阪』大阪宝文館、一九四三年)、高橋周「中井竹山・中井履軒による蝦夷地対策―経済的側面からの再検討」(『日本歴史』六九九号、二〇〇六年八月)を参照されたい。なお、竹山・履軒の師である五井蘭洲も基本的に履軒と同じ考えをしているが、蘭洲は津軽藩に仕えたこともある(懐徳堂文庫にある『履軒臥友』と題する詩の書き抜きの冊子の「五言長律」に蘭洲作「津軽雑詠」がある。書簡【その2】で、松前藩士の話を引くのは、蘭洲を通じたルートからだったかもしれない。

(八) 火吹達磨とは、小さな穴の付いた銅製の道具で、中に少量の水を入れ、穴から吹き出す蒸気を利用して火を起こしたという(『明治三十八家絶句』四〇葉裏の「火吹達磨」という詩の割書に「以レ銅作レ之、腹中貯レ水、得レ火吐レ氣、鼓二扇炉炭一、俗呼二火吹達磨一」とあるのがわかりよい)。『日本国語大辞典』や『広辞苑』にも載っており、大村益次郎のあだ名にもなっていたぐらいなので、珍しい物で

はなかったようだ。

伊藤幸司「ちょっと昔のアイデア商品　火吹達磨」（大阪市文化財協会編『葦火』三八号（七巻二号）（一九九二年六月）所収）に大阪市立博物館蔵の火吹達磨の写真がある。マトリョーシカ人形に似た達磨形で、顔が刻されており、その口の部分に針で突いたような小さな穴が開けられている。サイズはタテ五・八cmとあり、手の中に収まるほどの大きさであったことがわかる。水は「火にかけて温め、水の中につけて急冷し、口の穴から吸い込ませた」と言う。火鉢の中に入れて使ったようだが、どれだけ実用になったか疑問である（あるいは様子を見て楽しむものであったか）。

なお、三浦梅園の主著『玄語』に「吹火珠」と小見出しを付す一節がある。死没の前年に自筆で清書しなおしていた『玄語』地冊露部「水燥」の「得二吹火珠一弄レ之。一銅空丸。鑿二一織孔一。火レ之則發二一盡丸中之燥一。投レ水則以發二一盡燥一。喻レ水而實。實レ水投レ火、則結質解而為レ風竭。故会質将レ結則排二粗易一。而搾二一成實一。易象将レ發則衝二密会一而發二一成虚一。観二於小一推二之於大一、…」である（岩波書店「日本思想大系」四一『三浦梅園』四七五頁（島田虔次訳二三四頁）、『梅園全集』上巻一八〇頁）。この描写によれば、「吹火珠」は、上記の「火吹達磨」のことであろう。

梅園の記述で注目すべきは、この器具により気象のしくみを推測していることである。中井履軒もその「七胞論」において宇宙の寒暖を説明しているが、あるいはこのような器具により思いを馳せていたのかもしれない。

（九）井上了「中井履軒『弊帚』諸本および草稿の篇次について」（『懐徳堂センター報』二〇〇六）九八頁によると、一七七三年（安永二年）に同書の二冊目までは完成していたと言う。

【附録】

本稿で紹介した書簡【その4】を蔵する三浦梅園遺墨館は、以下のような竹山の自筆詩も所蔵している。

次韵大城君升從令尊過訪席上見贈

（大城君升　令尊に從い過訪し席上贈らるに次韵す）

知君家學力三餘　知れり　君が家學　三餘に力むるを
騂又生騂孰舍諸　騂　又た　騂を生み　孰か諸を舍かん
征棹遠衝風浪險　征棹　遠く衝く　風浪の險
旅裝俄訪薜蘿居　旅裝　俄かに訪う　薜蘿の居
賓筵酒薄儒餐在　賓筵　酒　薄くして　儒餐在り
驛路華濃蜀錦如　驛路　華　濃くして　蜀錦の如し
詩就同欽大藩美　詩　就り　同じく欽う　大藩の美なるを
坐間傳誦卷還舒　坐間　傳誦し　卷きて還た舒ぶ

積善拜

（注）＊次韵は、他人の作に韻を合わせること。＊三餘は、読書の時間として惜しむべき、冬（歳の餘）、夜（日の餘）、雨（時の餘）のこと。＊騂は、騂々で弓の調和する様（『詩経』「小雅」「角弓」）。＊薜蘿は、かずら。薜蘿の居はかずらの茂ったみすぼらしい家。＊卷舒は、卷くこととひろげること。

次韻君升賢弟後
令尊道訪席上見贈
知君家學力三餘辭
又生辭就舍諸征棹
遠衙風浪險旅裝俄
訪蘇蘿岳賓延酒
薄儒餐在驛茶懷
留船如詩就同飲
大庸美坐間傳簡卷
還舒
積善拜

（三浦梅園遺墨館友弘征一郎様提供）

この詩は、中井竹山著『奠陰集（詩集）』巻七（影印本382頁）（『懐徳堂遺書』所収活字本巻二「七言律」52b）に見える。『奠陰集（詩集）』巻七の同詩の直前の詩に「肥後大城文師之江都、途中枉駕口占以送其行、蓋步席上見示韵也」（活字本は巻四39a）と詞書きがあり、大城文師とその子君升が江戸に向かう途中、大坂に寄った際の詩であることがわかる。寛政三年（一七九一）の作である。

大城氏は肥後藩の藩儒だった（『漢文学者総覧』970参照）。大城壺梁（一七四一～一八一一）名は煥。字は文卿。通称は多十郎。号は壺梁。（『肥後文教史』『肥後先哲偉蹟』『肥後先哲評伝』『近世漢学者著述目録大成』）なお、肥後藩では藪孤山も竹山と交流があり、『奠陰集（詩集）』には多くの贈答詩が残されている。

『奠陰集（詩集）』巻五（影印本348頁）に「仲夏綾部伊承嘉招、与羽倉子晟、大城文師、葛子琴、及家弟、江上泛舟、兼送文師帰肥」と題する詩（安永六年・一七七七）があり、剛立の兄、綾部妥胤とともに大坂の文人と交流していたことがわかる。また、『懐徳堂先賢墨迹』（隆文館、一九一二年）には、大城壺梁作「呈竹山先生七律」が見える。

（岩見輝彦…元二浦梅園資料館研究員）
（湯城吉信…大阪府立工業高等専門学校准教授）